研究報告

日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査（第２報）
ー社会人経験の有無と学業に対する取り組み、学生生活に対する満足度の関係ー

大髙　恵美[1)]　伊藤美奈加[2)]　牟田　能子[1)]　三瓶　まり[3)]　佐々木理恵子[4)]

Trend Survey of Graduates in Japanese Red Cross in Akita Junior College of Nursing (Second Report)
- Regarding experience for being member of society, completing academic work and satisfaction level for school life -

Emi OOTAKA　Minaka ITOU　Yoshiko MUTA　Mari SAMPEI　Rieko SASAKI

要旨

本研究は卒業生の動向把握と在学中の教育や学生生活について卒業生がどのように評価しているかを明らかにすることを目的に本学看護学科卒業生を対象に無記名の質問紙調査を行った。158名の回答から以下の結果が得られた。

1．社会人経験のあった卒業生は入学時に看護師になりたい意欲が低い傾向にあったが、在学中は意欲的に勉学に取り組んだとする人が多く、看護師になることや学業を諦めようと思った人は少なかった。社会人経験のなかった卒業生は入学時には看護師になりたい意欲が高い傾向にあったが、在学中は意欲的に勉学に取り組んだとする人は半数であった。また、社会人経験のなかった卒業生の約30％は看護師になることや学業の継続を諦めようと思った経験をもっていた。その理由は学業面での困難や看護への魅力や意欲の低下であった。

2．卒業生の学生生活に対する満足度は、社会人経験の有無にかかわらず、「学習環境」、「同級生との交流」、「自己の成長」、「チューターとの交流」、「臨地実習」の項目が高く、「クラスアドバイザーとの交流」、「他学科学生との交流」、「看護学科の先輩・後輩との交流」、「部活動やサークル活動」、「ゆとりある学校生活」の項目が低い傾向にあった。

キーワード：卒業生、動向調査、学生生活、満足度

Summary : This study was conducted by an anonymous questionnaire given to the graduates of the Department of Nursing Science of this school, to evaluate the careers of these graduates and to clarify how the graduates evaluated the education and school life of this school. 158 graduates responded as follows:

1. Graduates with experience, being an active members of society, were likely to have less incentives to become a nurse at school entry, but most studied enthusiastically while in school and few thought about quitting or not completing the academic work. Graduates without experience of, being active members of society, were likely to have more incentive to become a nurse at school entry, but only half studied enthusiastically in school. 30% of the graduates without experience thought about quitting or not completing academic work. The reasons included difficulties faced in academic work and a decreased attraction or motivation for the nursing profession.
2. Irregardless of experiences of being active members of society, graduates had high satisfaction levels for school life in terms of learning environment, interaction level with classmates, personal development, communication with tutors, and opportunities for on-site training. They had low satisfaction levels for school life in terms of communication with class advisors, interaction with students of other departments and with senior and junior members of the Department of Nursing Science, also involvement in club and circle activities.

Key words : graduates, trend survey, student life, satisfaction

---

看護学科　1）講師　2）助手　3）助教授　4）教授

本研究は平成17年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成による研究の一部である。尚、本研究は第７回赤十字看護学会学術集会での報告に一部加筆・修正したものである。

はじめに

日本赤十字秋田短期大学は、開学10年を迎え、看護学科（以下、本学とする）はこれまでに約550名の卒業生を送り出している。

本学ではこれまでに入学生の受験理由や学科選択理由等についての調査[1) 2) 3) 4)]は行われているが、卒業生の動向に関する調査は行われていなかった。そこで、開学10年を迎えたのを機に、今後の教育や支援システムへの一助とするために卒業生の動向調査を行い、第1報では、卒業生の就業・進学状況と卒業後の資格取得等を報告した。

近年では社会人入学など学習機会の拡大に伴い、社会人経験をもちながら看護職を志す学生が増えてきている。本学でも開学２年目から社会人入学制度を導入し、これまでに26名（１～７期生）の社会人経験者を受け入れている。

藤岡ら[5)]は「看護教育において同年齢集団を前提としていた大学や専門学校でも、社会人入学者が増加しており、たとえ学習動機が一緒だったとしても、彼らは異なった個々の生活史、社会的な立場、教育経験、性格、価値観、習慣がある」と述べている。このことから、社会人経験をもつ卒業生が本学の教育や学生生活に対してどのように評価しているかを把握する必要があると考えた。

そこで、第２報では社会人経験の有無による入学時や在学中の学業に対する取り組み状況、学生生活に対する満足度の傾向をみたので報告する。

Ⅰ．研究目的

卒業生の入学時や在学中の学業に対する取り組み状況、学生生活に対する満足度について社会人経験の有無による傾向を明らかにする。

Ⅱ．研究方法

１）調査対象：本学1期生から7期生までの卒業生543名のうち研究に同意が得られた293名。回答者数は163名、回収率55.6％、有効回答数163のうち、社会人経験の有無について記載があった158名を調査対象とした。

入学時に社会人経験が「有」（以下、「経験者」とする）は14名（8.9％）であった。調査時に13名（92.9％）が就業しており、職種は看護師12名（92.3％）、助産師1名（7.7％）で、年齢分布は27歳から43歳、平均年齢は34.3歳（SD±5.4）であった。

社会人経験が「無」（以下、「未経験者」とする）は144名（91.1％）であった。調査時に135名（93.8％）が就業しており、職種は看護師129人（95.5％）、保健師4名（3.0％）、助産師2名（1.5％）で、年齢分布は21歳から28歳、平均年齢は24.5歳（SD±2.8）であった。

２）調査方法：留め置き法による質問紙調査。質問紙は先行研究[6) 7) 8) 9)]を参考に内容を検討し、プレテストを行い作成した。

３）調査期間：平成17年10月～12月

４）倫理的配慮：本学卒業時の連絡先に調査目的・方法、卒業生の個人評価を目的とするものではないこと、匿名性の遵守や権利擁護を記した往復葉書を送付し、協力できる場合に返信葉書にサインをもらい同意書とした。次に同意が得られた293名に対し調査用紙を送付した。

５）分析方法：分析データは入学時の状況と在学中の学業への取り組み状況、学生生活に対する満足度である。但し、カリキュラムや学生支援体制に関する満足度は卒業の時期により質問が異なっている。学校生活の満足度の分析は５段階評価とし５点から１点の得点を与え平均を求めた。理由等の自由記述は共同研究者で分析、カテゴリー化した。

Ⅲ．結　果

１）入学時の状況

(1) 学歴

「経験者」の学歴は大学卒７名（50.0％）、短大卒４名（28.6％）、高校卒３名（21.4％）であった。

「未経験者」の学歴は高校卒143名（99.3％）、短大卒１名（0.7％）であった。

(2) 看護学科への入学動機

「経験者」の入学動機は「将来自立するための資格が得たい」５名（38.4％）、「看護の知識を一般教養として有用と考えた」３名（23.1％）、「赤十字の学校で学びたかった」２名（15.4％）、「周囲の人にすすめられた」１名（7.1％）、「看護師になることが子供の頃からの夢であった」１名（7.1％）、その他１名（7.1％）、無回答1名（7.1％）であった。

「未経験者」の入学動機は「将来自立するための資格が得たい」39名（27.5％）、次いで「看護師になることが子どもの頃からの夢であった」37名（26.1％）が多かった。「希望校に入学できなかった」17名（11.9％）、「短大卒業

の学歴が得たい」９名（6.3%）、「周囲の人にすすめられた」６名（4.2%）、「ただ何となく」５名（3.5%）、その他４名（2.8%）であった（表１）。

表１　未経験者の看護学科への入学動機

n＝142

入学動機	人数(%)
将来自立するための資格が得たい	39(27.5)
短大卒業の学歴が得たい	9 (6.3)
やりがいのある職業と考えた	13 (9.2)
看護の知識を一般教養として有用と考えた	0
周囲の人にすすめられた	6 (4.2)
希望校に入学できなかった	17(11.9)
看護師になることが子どもの頃からの夢であった	37(26.1)
赤十字の学校で学びたかった	12 (8.5)
ただ何となく	5 (3.5)
その他	4 (2.8)
合計	142 (100)

単位：人数(%)

(3) 看護学科への志望順位

158名中93名（58.9%）が本学を第一志望としていた。そのうち、「経験者」は14名中９名（64.3%）、「未経験者」は144名中84名（58.3%）であった。

(4) 入学時に看護師になりたい意欲の程度

「経験者」の看護師になりたい意欲は、「非常に強い」２名（14.3%）、「強い」１名（7.1%）、「普通」４名（28.6%）、「弱い」３名（21.4%）、「非常に弱い」４名（28.6%）であった。「経験者」の50%は看護師になりたい意欲が「普通」以上であった。

「未経験者」の看護師になりたい意欲は「非常に強い」34名（23.6%）、「強い」49名（34.0%）、「普通」53名（36.8%）、「弱い」７名（4.9%）、「非常に弱い」１名（0.7%）であった。「未経験者」の約95%は看護師になりたい意欲が「普通」以上であった。

(5) 看護師を志した時期

「経験者」が看護師を志した時期は「本学在学中」５名（45.5%）、次いで、「中学校以前」３名（27.2%）、「高校在学中」１名（9.1%）、「本学卒業後」１名（9.1%）であった。「経験者」の約45%は在学中に看護師を志していた。

「未経験者」が看護師を志した時期は「高校在学中」73名（52.2%）が最も多く、次いで、「中学校以前」55名（39.3%）、「本学在学中」９名（6.4%）、「本学卒業後」２名（1.4%）であった。「未経験者」の約92%は本学に入学する前に看護師を志していた。

(6) 看護職を志した理由

看護職を志した理由を複数回答（３つを限度とする）で求めた。その結果、「経験者」が看護職を志した理由は「一生役立つ資格が得られるから」11名（29.7%）が最も多く、次いで「女性が自立できる」４名（10.8%）、「収入が多い」、「仕事の重要性とやりがい」、「人を相手の仕事だから」、「身近な人が看護職であった」各３名（8.1%）であった。一方、「看護者の働く姿をみてあこがれた」、「希望の進路に進めなかった」、「才能を活かせる」、「なんとなく」を理由とした人はいなかった。

「未経験者」が看護職を志した理由の上位項目は「一生役立つ資格が得られるから」98名（23.4%）が最も多く、次いで「仕事の重要性とやりがい」56名（13.4%）、「看護者の働く姿をみてあこがれた」42名（10.0%）、「人を相手の仕事だから」35名（8.4%）、「社会的に意義のある職業である」33名（7.9%）、「身近な人が看護職であった」32名（7.6%）であった。また、下位項目は「希望の進路に進めなかった」８名（1.9%）、「なんとなく」７名（1.7%）、「家庭生活に活かせる」５名（1.2%）、「才能を活かせる」１名（0.2%）であった（表２）。

表２　未経験者の看護職を志した理由
（上位３項目までの複数回答）　n＝144

理由	人数	(%)
一生役立つ資格が得られるから	98	23.4
社会的に意義のある職業である	33	7.9
仕事の重要性とやりがい	56	13.4
人を相手の仕事だから	35	8.4
才能を活かせる	1	0.2
家庭生活に活かせる	5	1.2
女性が自立できる	18	4.3
収入が多い	10	2.4
就職に困らない	23	5.5
他人のすすめ	19	4.5
身近な人が看護職であった	32	7.6
看護者の働く姿をみてあこがれた	42	10
看護という仕事が好きである	25	5.9
なんとなく	7	1.7
希望の進路に進めなかった	8	1.9
その他	7	1.7
合計	419	100

単位：人数(%)

2）在学中の学業に対する取り組み状況

(1) 勉学に対する意欲

「経験者」の在学中の勉学に対する取り組みは「意欲的だった」12名（85.7%）、「どちらともいえない」２名（14.3%）であった。

「未経験者」の在学中の勉学に対する取り組みは「意欲的だった」67名（46.9%）、「意欲的

でなかった」19名（13.2%）、「どちらともいえない」57名（39.9%）であった。

(2) 学業継続を諦めようと思ったこと

「経験者」で在学中に看護師になることや学業の継続を諦めようと思ったことがあった人は14名中２名（14.3%）で、理由（複数回答）は「看護に魅力を感じなくなった」、「意欲がなくなった」各１名（25.0%）であった。主な相談相手は「学外の友人」、「看護学科以外の短大の教員」各１名（50.0%）で、学業を継続できた理由は共に「家族や友人など周囲の支えがあったから」であった。

「未経験者」で看護師になることや学業の継続を諦めようと思ったことがあった人は144名中46名（31.9%）、であった。諦めようと思った理由（複数回答）は「看護師に向いていないと思った」37名（30.9%）が最も多く、次いで、「課題が多くて大変であった」28名（23.3%）、「意欲がなくなった」18名（15.0%）、「学習内容が難しくてついていけないと思った」16名（13.3%）、「看護に魅力を感じなくなった」8名（6.7%）の順であった（表３）。諦めようと思った時期は、１年次は１名（2.1%）、２年次は11名（23.4%）、３年次は19名（40.5%）で、関連する出来事は『臨地実習』と答えた。

表３　未経験者が在学中に看護師になることや学業の継続を諦めようと思った理由（上位３項目まで選択）　n＝46

理由	人数	(%)
課題が多くて大変であった	28	23.3
学習内容が難しくついていけないと思った	16	13.3
看護師に向いていないと思った	37	30.9
看護に魅力を感じなくなった	8	6.7
他にやりたいことが見つかった	1	0.8
意欲がなくなった	18	15
友人との人間関係上のつまづきがあった	1	0.8
教師との関係上のつまずきがあった	2	1.7
経済的に大変であった	1	0.8
その他	8	6.7
合計	120	100

単位：人数(%)

諦めようと思った際に46名中35名（76.1%）が他者に相談していた。主な相談相手（２名を限度とする複数回答）は「学内の友人」28名（51.0%）、「学外の友人」８名（14.5%）、「両親」７名（12.7%）、「兄弟姉妹」５名（9.1%）、「クラスアドバイザー・チューター以外の看護学科教員」５名（9.1%）、「クラスアドバイザー」、「チューター」各１名（1.8%）であった。「未経験者」の相談相手は約65%が「友人」、約20%が「家族」、約12%が「学科の教員」であった。

学業を継続できた理由（複数回答）は、「家族・友人など周囲の支えがあったから」16件（39.0%）、「親に迷惑をかけたくないから」９件（22.0%）、「看護職の仕事に魅力・興味がわいたから」、「看護師になりたかったから」各８件（19.5%）であった。

３）学生生活に対する満足度

「経験者」の学生生活（21項目）の満足度の平均値が、3.0以上の項目は18項目、3.0未満だった項目は３項目であった。平均値が高かった項目は「短大の施設・設備」（4.2±1.2）、次いで「短大のキャンパス環境」（4.2±1.1）、「同級生との交流」（3.8±1.2）、「チューターとの交流」（3.8±1.2）、「自己の成長」（3.8±1.1）、「教師との交流」（3.7±1.1）、「専門ゼミナールの内容および方法」（3.6±1.3）、「臨地実習の内容および方法」（3.6±1.2）「臨地実習における教師の指導体制」（3.6±1.1）、「講義の内容および方法」（3.6±1.1）であった。また、低かった項目は「クラスアドバイザーとの交流」（2.0±1.0）、「他学科学生との交流」（2.7±1.1）、「ゆとりある学校生活」（2.8±0.9）、「部活動やサークル活動」（3.0±1.1）、「看護学科の先輩・後輩との交流」（3.0±1.2）であった。

「経験者」の在学中の学校生活に対する総対的満足度は3.9±1.2であった。

「未経験者」の学生生活（21項目）の満足度の平均値が、3.0以上の項目は16項目、3.0未満だった項目は５項目であった。平均値が高かった項目は「同級生との交流」（3.8±1.0）、次いで「短大の施設・設備」（3.7±1.1）、「短大のキャンパス環境」（3.6±1.1）、「チューターとの交流」（3.5±1.2）、「自己の成長」（3.5±1.0）、「臨地実習における教師の指導体制」（3.5±0.9）、「臨地実習の内容および方法」（3.5±0.9）であった。また、低かった項目は「クラスアドバイザーとの交流」（2.3±1.0）、「他学科学生との交流」（2.4±1.0）、「看護学科の先輩・後輩との交流」（2.5±1.0）、「部活動やサークル活動」（2.6±1.2）、「ゆとりある学校生活」（2.9±1.1）であった（表４）。

「未経験者」の在学中の学校生活に対する総対的満足度は3.7±0.9であった。

表４　未経験者の在学中の学生生活に対する満足度

項目	満足5	4	3	2	1	計(%)	平均±SD
短大のキャンパス環境	34(23.6)	49(34.0)	39(27.1)	18(12.5)	4(2.8)	144(100)	3.6±1.1
短大の施設・設備	39(27.1)	50(34.7)	37(25.7)	12(8.3)	6(4.2)	144(100)	3.7±1.1
同級生の人数	29(20.1)	31(21.5)	60(41.7)	19(13.2)	5(3.5)	144(100)	3.4±1.1
カリキュラムとその編成	12(8.5)	20(14.1)	71(50.0)	29(20.4)	10((7.0)	142(100)	3.0±1.0
講義の内容および方法	12(8.4)	27(18.9)	72(50.3)	27(18.9)	5(3.5)	143(100)	3.1±0.9
演習の内容および方法	14(9.7)	37(25.7)	74(51.4)	17(11.8)	2(1.4)	144(100)	3.3±0.9
看護過程の演習	17(11.9)	42(29.4)	56(39.1)	25(17.5)	3(2.1)	143(100)	3.3±1.0
臨地実習の内容および方法	19(13.2)	46(31.9)	64(44.4)	14(9.7)	1(0.7)	144(100)	3.5±0.9
臨地実習における教師の指導体制	21(14.6)	51(35.4)	53(36.8)	19(13.2)	0	144(100)	3.5±0.9
臨地実習における臨床の指導体制	15(10.4)	48(33.3)	58(40.3)	21(14.6)	2(1.4)	144(100)	3.4±0.9
教師との交流	16(11.0)	44(30.6)	56(38.9)	23)16.0)	5(3.5)	144(100)	3.3±1.0
同級生との交流	39(27.1)	51(35.4)	42(29.2)	12(8.3)	0	144(100)	3.8±1.0
看護学科の先輩・後輩との交流	6(4.2)	14(9.7)	53(36.8)	49(34.0)	22(15.3)	144(100)	2.5±1.0
他学科学生との交流	4(2.8)	13(9.0)	52(36.1)	43(29.9)	32(22.2)	144(100)	2.4±1.0
部活動やサークル活動	11(7.7)	17(11.8)	46(32.2)	40(28.0)	29(20.3)	143(100)	2.6±1.2
ゆとりある学校生活	10(6.9)	29(20.2)	52(36.1)	35(24.3)	18(12.5)	144(100)	2.9±1.1
自己の成長	21(14.7)	48(33,6)	62(43.3)	10(7.0)	2(1.4)	143(100)	3.5±1.0
卒業研究の内容および方法(1～5期生)＊	10(11.1)	26(28.9)	29(32.2)	15(16.7)	10(11.1)	90(100)	3.2±1.2
クラスアドバイザーとの交流(3～5期生)＊	1(2.3)	4(9.1)	14(31.8)	17(38.6)	8(18.2)	44(100)	2.3±1.0
専門ゼミナールの内容および方法(6･7期生)＊	8(15.7)	20(39.2)	18(35.3)	4(7.8)	1(2.0)	51(100)	3.4±1.2
チューターとの交流(6･7期生)＊	12(21.1)	21(36.8)	1729.8)	4(7.0)	3(5.3)	57(100)	3.5±1.2

＊は(　)内を対象とした調査項目である　　単位：人数(%)

Ⅳ．考　察

１）入学時の状況

「未経験者」の看護学科への入学動機は「将来自立するための資格が得たい」と「看護師になることが子どもの頃からの夢であった」が多く、次に「希望校に入学できなかった」が続いた。これは看護系短期大学生の学科選択理由を調査した一戸ら[10]の結果と同様であった。看護職を志望する理由は「資格取得」、「仕事の重要性とやりがい」、「あこがれ」が多かった。このことから、「未経験者」は「資格取得」や「夢やあこがれの実現」を目指し本学に入学してきたと考えられる。また、「希望校に入学できなかった」や「希望の進路に進めなかった」や「なんとなく」等の消極的理由で入学している「未経験者」がいることも明らかになった。しかし、入学時に「未経験者」は看護師を志望している人が約92%、看護師になりたい意欲が「普通」以上の人が約95%であったことから、看護師になるという意識をもって入学しているといえる。

一方、「経験者」は入学時に看護師になりたい意欲が「普通」以上であった人が50%で、看護師を志した時期は在学中と答えた人が多かった。また、入学動機は「将来自立するための資格が得たい」、志望理由は「一生役立つ資格が得られるから」、「女性が自立できる」を選んだ人が多く、「あこがれ」や「なんとなく」といった理由で看護職を志した人はいなかった。これらのことから「経験者」は「資格取得」、「自立」を目指し入学しているといえる。

２）在学中の学業に対する取り組み

「未経験者」で在学中に勉学に意欲的に取り組んだ人は約47%であった。また、約30%が在学中に看護師になることや学業の継続を諦めようと思った経験があり、これは学年が進むにつれて多くなる傾向にあった。また、諦めようと思った経験に関連した出来事は臨地実習をあげていた。

臨地実習は看護教育の中で学習の統合の場として重要であり、実際に患者にかかわって得られる感動や看護する楽しさや魅力を実感できる。しかし、一方では患者の病状の変化に応じた看護を行わなければならないため、「不安」や「自信喪失」などが生じやすい。このことを野村[11]は「複雑で多様な臨床の場で学生が戸惑い立ち往生するのはごく自然な姿である」と述べている

また、看護師になることや学業の継続を諦めようと思った理由で多かったのは「看護師に向いていない」次に「学習面の困難」や「意欲や看護への魅力の低下」であった。堀[12]は「看護について知りたい、看護師になりたいと望んで入学したとしても、全ての学生が自己学習力を備えているわけではない。教授される内容が理解できなかったり、それまでに抱いていた看護という姿が異なっていることに気づき、学習意欲が変化する学生も出てくる」と述べている。また、藤岡ら[13]は「自

分は看護師に向いていないのではないかというのは学生が経験する「恐れ」であり、それは「看護者になりたい」という学生の願いの裏返しである」と述べている。これらのことから、「未経験者」が入学時に意欲がありながら途中で迷うのは学習面の困難や入学時に抱いていた理想や夢とのギャップが影響していたと考える。

しかし、在学中に学業の継続を諦めようと思ったことのある「未経験者」は、友人や家族等の相談相手に支えられ学業を継続できたことが明らかになった。堀[14]は「学生同士がお互いに学びあうことは、自らの枠を超えたり他者との協調性を養う意味からも重要なことである」と述べている。これらのことから、特に実習中は家族からの支援と同時に学生同士が相互に助け合い学び合う環境を形成できるように教員が支援することが大切と考える。

「経験者」は在学中の学習への意欲が高く、学業の継続を諦めようと思った経験のある人は「未経験者」に比べ半数の割合であった。これは「経験者」が資格取得することが自立につながるという明確な目標をもっていることが影響しているといえる。

3）学生生活に対する満足度

学生生活に対しては、「経験者」、「未経験者」ともに「学習環境」、「同級生との交流」、「自己の成長」、「チューターとの交流」、「臨地実習」の項目に対する満足度が高く、「クラスアドバイザーとの交流」、「他学科学生との交流」、「看護学科の先輩・後輩との交流」、「部活動やサークル活動」、「ゆとりある学校生活」の項目に対する満足度が低かった。このことから「経験者」と「未経験者」の学生生活に対する満足度の傾向は同じといえる。

「学習環境」の満足度が高かったのは本学が新設校であったため施設・設備等が整っていたことが影響したと考える。「同級生との交流」の満足度が高かったのは、同じ目的に向かって講義や実習を一緒に3年間過ごしたことや困った事や悩みが生じた際にお互いを支えあうなどした経験が関連しているのではないかと考える。また、「自己の成長」の満足度が高かったのは、「経験者」と「未経験者」は年齢や人生経験に差はあるが、看護を学ぼうとする気持ちは同じであることから相互によい影響を及ぼし自分自身の成長を感じることができたのではないかと考える。「臨地実習」は教員の看護に対する考えや取り組み等を直接学ぶ機会であるため満足度が高かったとみられる。

本学のチューターと呼ばれる教員の役割は一定期間継続して5～15名前後の学生を受け持ち、学習支援や学生生活における悩み等に関して個別に相談を受け支援をすることである。「チューターとの交流」に対する満足度が高かったことから、チューターは学生の支援ができていたと評価できる。クラスアドバイザーは学年の総括として学生とチューターの支援を行っている。「クラスアドバイザーとの交流」に対する満足度が低かったのは、チューターに比べ学生への直接的な関与が少ないことが影響していると考える。

「部活動・サークル活動」や「他学科学生との交流」、「看護学科の先輩・後輩との交流」の満足度が低かったのは、本学の部活動やサークル活動が低調であること、また学年が進むにつれ、カリキュラムが過密となり部活動やサークル活動ができにくい状況であることが影響していると考える。

今回の調査から卒業生は在学中に他学科の学生や看護学科の同級生以外の学生と交流を望んでいたと考えられる。本学看護学科の教育目標の一つに「他者との建設的な人間関係を築くことができる人を育成する」をあげている。人間関係の本質ともいえる「コミュニケーション能力」は他者との交流を通して形成される。服部[15]は青年期の人間関係について「非性的な同性の親友や複数の仲間と心をつなぎ、活動を共有することは、他者と共感したり、親密感や忠誠心を抱くよい経験になる」と述べている。これらのことから、他学科の学生や看護学科の同級生以外の学生が交流する行事や合同講義・演習等の教育方法を検討する必要があると考える。

総対的な満足度は「経験者」は3.9±1.2、「未経験者」は3.7±0.9であったことから、卒業生は本学の学生生活に対して概ね満足しているといえる。

V．結論

卒業生を対象とした調査から以下のことが明らかになった。

1．社会人経験のあった卒業生は入学時に社会人経験のなかった卒業生に比べ、看護師になりたい意欲が低い傾向にあったが、在学中は意欲的に勉学に取り組んでいる人が約86％で看護師になることや学業の継続を諦めようと思った人は少なかった。

社会人経験のなかった卒業生は入学時の看護師になりたい意欲は高い傾向にあったが、在学中は意欲的に勉学に取り組んだ人は約47％であった。また、社会人経験のなかった卒業生の約30％は学業面での困難や看護への魅力や意力の低下等を理由に看護師になることや学業の継続を諦めようと思った経験をもっていた。

２．学生生活に対する満足度は社会人経験の有無にかかわらず、「学習環境」、「同級生との交流」、「自己の成長」、「チューターとの交流」、「臨地実習」の項目が高く、「クラスアドバイザーとの交流」、「他学科学生との交流」、「看護学科の先輩・後輩との交流」、「部活動やサークル活動」、「ゆとりある学校生活」の項目が低い傾向にあった。

今回の調査では、本学への入学方法について調査をしていないため、「経験者」、「未経験者」の入学方法と満足度の関連性について検討することはできなかった。また、社会人経験のある対象者数が少なく、一般化するには限界がある。今後、継続的な調査の必要性がある。

謝　辞

最後に今回の調査にご協力いただきました卒業生の方々に深謝いたします。

引用文献：

１）酒井志保，滝内隆子，佐々木真紀子，大島弓子：看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態－本学看護学科1期生の入学時調査から－，日本赤十字秋田短期大学紀要，№1，pp77-83，1996.

２）酒井志保，滝内隆子，大島弓子，佐々木真紀子，南雲美代子：看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態（第２報）－本学看護学科２期生の入学時調査から－，日本赤十字秋田短期大学紀要，№２，pp33-41，1997.

３）齋藤和樹他，看護学生の学科志望動機、人生の意味・目的意識、性格特性の関連について－ＰＩＬとＴＥＧの分析を通して－，日本赤十字秋田短期大学紀要，№４，pp3-8，1999.

４）大髙恵美，三浦睦子，佐藤サツ子：看護学生の入学時の期待と満足度の実態－入学１年後の調査から－，日本赤十字秋田短期大学紀要，№６，pp1-7，2001.

５）藤岡完治，堀喜久子編集：看護教育の方法，p28，医学書院，2002.

６）山崎裕二他:武蔵野赤十字高等看護学院および日本赤十字武蔵野女子短期大学の卒業生動態調査（報告１）－就業状況，進学･研修状況，転職・退職状況，職業意識等について－，日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要，第８号，pp113-125，1995.

７）市江和子他：日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査（その１）－就業状況･職業意識を中心に－，日本赤十字愛知短期大学紀要，第12号，pp83-92，2001.

８）高梨一彦，三浦秀春他：弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査（１）－調査の目的と方法および卒業生の現状について－，弘前大学医療技術短期大学紀要，第23号，pp1-38，1999.

９）佐々木幾美：卒業生からみた看護系大学教育の評価－問題提起と研究枠組み－，Quality Nursing, 4(10), pp5-10, 1998.

10）一戸とも子，木立るり子，石崎智子他：弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査（２）－看護教育と学生生活への評価－，弘前大学医療技術短期大学紀要，第23号，p40，1999.

11）５）前掲:野村明美担当，p113

12）５）前掲：p74

13）５）前掲：p10

14）５）前掲：p75

15）服部祥子：人を育む人間関係論，p37，医学書院 2003.

参考文献

・榎本麻里：社会的経験を持った人の学習を支援する授業･実習のあり方について，看護教育，41(3)，pp189－192，2000.

・市江和子他：日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査（その２）－進学･退職理由を中心に－，日本赤十字愛知短期大学紀要，第12号，pp96-106，2001.

・一戸とも子他：弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査（８）－学業生活に満足度の低かった項目及び看護教育に対する自由記述の分析－，弘前大学部保健学科紀要，第１号，pp1-11，2002.

・岩田浩子：看護学生の学生生活に関する意識－職業的社会化に関する要因と学生生活満足度－，看護教育38(5)，pp370-375，1997.

・川崎くみ子他：弘前大学医療技術短期大学部看護学

科卒業生の追跡調査（３）－就業状況と職務満足度（第１報）－，弘前大学医療技術短期大学部紀要，第23号，pp51-62，1999.
・日本看護系大学協議会広報・出版委員会編：看護学教育－学生･教員・体制－，日本看護協会出版会，2003.
・奥村潤子他：日本赤十字愛知短期大学における看護の進路選択動機と入学動機－1998年度入学生と1999年度入学生の比較－，日本赤十字愛知短期大学紀要，第11号，pp15-21，2000.
・鈴木祐子他：武蔵野赤十字高等看護学院および日本赤十字武蔵野女子短期大学の卒業生動態調査（報告２）－本学で受けた教育への評価，本学の将来構想への見解にについて－，日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要，第９号，pp44-62，1996.